

他教科領域や地域と連携し、 子供がつくりだす喜びを味わう 学習展開の在り方

～コロナ禍で表す「海」と「いのち」～

《執筆者》村重 仁美

勤務先：山口県下関市立養治小学校 教諭

出身校：信州大学 教育学部 学校教育教員養成課程 芸術教育専攻美術教育分野



概要

「海」「いのち」という題材から造形的なよさや美しさ、面白さを見出し、子供たちが自分のこれまで生きてきた経験とイメージを大切にしながら表現できる土壌で、子供たちに多様な表現活動を可能にするための指導展開を模索した一年間の授業実践の記録である。

造形に関する子供たちを取り巻く意識と環境を調べるために、小学校3年生の本学級を対象にして2022年度初めに行ったアンケートの集計結果からは、コロナ禍にあって社会や生活とのつながりが希薄にならざるを得ない実態が続いていることがわかった。年度当初「海」や「いのち」は、子供たちとはかけ離れたものとして存在していたが、これらを表現することによって自己の表現や存在をとらえ直し、「生きる力」を身に付けてほしいと考えた。

主題にせまるための研究の視点は次のようなものである。

- ア 子供が生活や社会と豊かにつながる場があること
- イ 子供が自分の感覚や行為、イメージを大切にしながら、新しくイメージをつくること

- ウ 子供たちが互いの作品のよさや美しさ、感覚やイメージを交換できる場があること
- エ 様々な人・場へ、自分の表現を発信する機会があること

表現行為の観察による形成的な指導と評価、デジタルポートフォリオによる子供の自己評価、多様性を認め合う鑑賞、公共の場で自分の作品を発信する場の提供などを手立てとし、教科等連動の指導展開の中で視点に沿い実践を蓄積していった。

成果としては、表現の造形的な多様性・それを認め合う姿や、デジタルポートフォリオの継続的な記録により、自分の表現行為を肯定しながら前向きに製作に取り組む姿が子供たちに見られるようになった。また、子供の作品やそこに付された作品の紹介文からは、「海」や「いのち」に関する表現をつくりだす喜びを支える心情の育ちが見られた。そして、子供たちのつくりだす喜びは、教師間、保護者や地域、関係機関へと共感の広がりを生み、大きくなった。

目次

はじめに

1. 問題意識
2. 2021年度の実践から今回のテーマ設定に至るまで
3. 実践内容と指導の視点
 - ア 子供が生活や社会と豊かにつながる場があること
 - イ 子供が自分の感覚や行為、イメージを大切にしながら、新しくイメージをつくること
 - ウ 子供たちが互いの作品のよさや美しさ、感覚やイメージを交換できる場があること
 - エ 様々な人・場へ、自分の表現を発信する機会があること

4. 指導の具体

「すてきから始まる絵」の指導展開
「協同製作関門海峡」での子供たちの製作の様子

5. 子供たちの成長を中心とする成果
6. 教師の指導を中心とする成果
7. 社会とつながることでの成果
8. 実践を通しての課題

はじめに

下関市立養治ようじ小学校は、本州の西の端に位置し、関門海峡や関門橋、巖流島、瀬戸内海国立公園である火の山が校区内に位置している。また、本校は市の中心的な市街地・商業地に位置しており、昨今では児童数の減少が続いている。どの学年も20人前後の単学級で構成されており、少人数ながらも恵まれた資源を生かした学習展開が可能である。

1. 問題意識

2021年度は、小学2年生で、生活科・国語科・図画工作科に関連をはかり、教科等連動的に「絵で表そう『ようじの町』」の実践¹を行った。造形表現に多様性が見られるようになり、つくりだす喜びが子供たちの姿から感じられる手ごたえがあった。まず、造形に関する子供たちを取り巻く意識と環境を、より客観的に調べるために、2022年度初めに行ったアンケートの集計結果は以下のようなものである。

- 「家庭の日常の中でもものをつくったり描いたりする経験」には個人差があり学級の25%の子供が肯定的な回答をし、「よくつくる」という子供は少数派である。
- 「身の回りにある景色やものを見て美しいと感じるか」という項目では、学級の30%の子供が「あまりない」「全くない」と回答している。
- 「美術館へ足を運ぶ機会」はほとんど90%近くの子供が無いようである。
- 「海や山などの自然とかかわって遊ぶか」の項目には個人差があるが、ほとんどの子供は「たまに」と回答している。
- 「自分の足で公園へ行く」子供の数は、昨年度より減っており、25%（学年が上がり、放課後の時間が短いのではないと思われる）。
- 「先生や親以外の大人と話す人数は1日にどれくらいか」の項目では、50%の子供が1~2人と回答している。
- 「春夏秋冬をよく感じるか」の項目には約半数の子供が肯定的な回答をした。
- 「命の尊さを感じるか」の項目では、68%の子供が肯定的な回答をした。

このように、コロナ禍にあって社会や生活とのつながりは希薄にならざるを得ない実態が続いていることがわかった。

また、家庭や日常の中でもものをつくったり描いたりする経験や、美術館に足を運ぶ経験などについても少ないままであり、今を生きる子供たちが、図画工作科で行う学習展開の在り方を考えさせられた。

2. 2021年度の実践から今回のテーマ設定に至るまで

「絵で表そう『ようじの町』」の実践では、子供たちの表現の豊かさは、教科等を連動した成果によるものであったり、言語能力が発達し語彙が増えた成果であったりするものも多かった。例えばすすんでまちを探検することのできる子供の絵や、まちの人に話しかけることのできる子供の絵は、好奇心や喜びに満ち溢あふれた主題や色彩、タッチで描かれている(次ページ・図1)。

「表したいこと」(表現内容)や「表し方」(表現方法)において造形的豊かさを示した作品は、それだけではなかった。コロナ禍で活動自粛うたが謹うたわれ、思うように外出できない日々が続く、学校でも「まち探検」をすることがかなわなかった時期もある。「自分が知っているまちの美しさは、火花だけだ。それでも夜空に浮かぶ火花が美しい」と言い、泣いていた子供の絵の夜空と余白の美しさ(次ページ・図2)。親が医療従事者で外出自粛が続く子供が、「いつかまちを探検してみたい」と夢見て描いた、パン屋さんのパンが空中に飛び交う絵(次ページ・図3)。これらから、環境や経験値が異なっても、子供の中に自分のイメージや感覚、感性を大切に豊かに表現できる土壌があれば、つくりだす喜びを味わうことができるのではないかと考えた。

筆者は昨年度同様、教科等連動的に学習展開を計画し、テーマを「海」と「いのち」とするとともに、テーマ設定においては、次の点に留意することとした。

イメージ豊かな対話が積み重ねられると同時に、これまで生きてきて培ってきたイメージや感覚が認められること。さらに、様々な表現行為が許されること。そのような土壌で、子供たちが自分自身の力で試行錯誤し、自分の存在や成長を感じつつ、新しいものや未知の世界へ向かう楽しさを味わうことができること。「海」と「いのち」という題材から生み出された表現が、生活経験の少ない子供たちがそれに関わる自己をとらえ、これからの生きていく子供たちの「生きる力」となることを願い、このテーマを設定した。

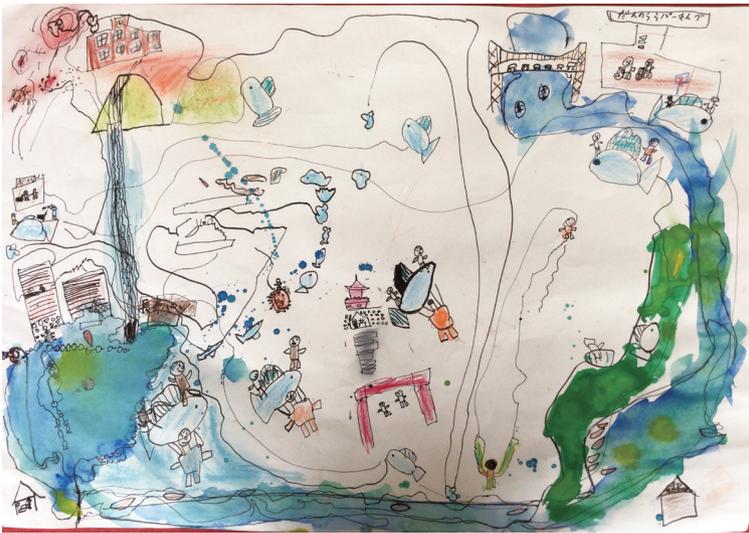


図1 「海とよじの町の美しさ」



図2 「よじの町の花火と海」



図3 「空はんたいになったよじの町」

3. 実践内容と指導の視点

情報化した子供たちの生活において、「海」や「いのち」のイメージをもつことは比較的簡単であっても、そこからつくりだす喜びを感じることは、容易なことではないと考える。

なぜなら、子供たちの生活はすでに現代的であり、特にコロナ禍にあって地域とのつながりや保護者同士のつながりも希薄であるため、「海」や「いのち」が生活とかけ離れたものとして存在し、「海が〇〇であってほしい」「海を〇〇したい」「命が尊い」という切実な願いや思いをもつことが難しくなっているからである。

「海」「いのち」という題材から造形的なよさや美しさ、面白さを見出し、子供たちが自分のこれまで生きてきた経験とイメージを大切にしながら表現できる土壌をつくるために、研究の方法として次のような視点を考えた（これらの視点は、相互にかかわり合う関係にある）。

- ア 子供が生活や社会と豊かにつながる場があること
- イ 子供が自分の感覚や行為、イメージを大切にしながら、新しくイメージをつくること
- ウ 子供たちが互いの作品のよさや美しさ、感覚やイメージを交換できる場があること
- エ 様々な人・場へ、自分の表現を発信する機会があること

この視点に沿い、実践内容を述べる。

ア 子供が生活や社会と豊かにつながる場があること

子供たちが総合的な学習の時間²の体験的な学習や探究的な学習で得た知識や経験が、自然に表現に結びつくように単元を配置した。体験学習では、地域資源を生かして様々なことを繰り返し実感できるようにした。国語科では、文章的に正しいだけでなく、これまでの経験や知識が統合されているかどうかを考えたり、人に伝えるためにはどんな文章や言葉を選ばよいかを考えたりする機会を多くとるようにする。(図4) (32ページ・表1)

場の設定だけでなく、「豊かにつながる」ために、例えば、磯で出会った生き物を飼育し、その飼育方法について水族館の学芸員さんに電話で聞いたり、沸き起る生の疑問を自分たちの力で解決したりできるように支援する。また、対象と自分の生活を何度も往復する過程の中で、海

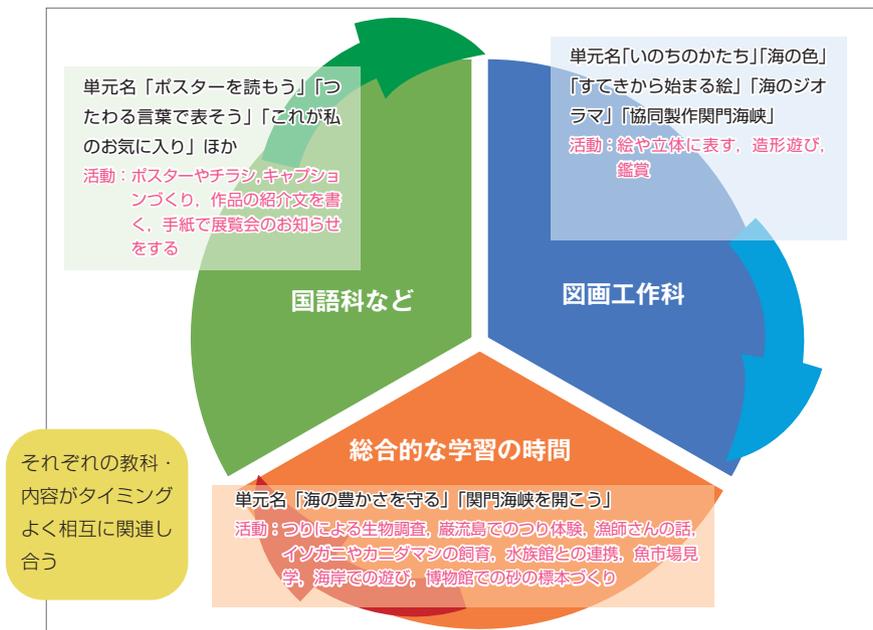


図4 教科等連動のイメージ図

洋ゴミの影響や生物の死に直面することを通し、厳しい環境の中で生物が生きていることは尊いことであるという実感をも、積み重ねられるようにする。さらに、学校の行き帰りや家族と体験したこと、地域で見たことなどについての小さな対話を響かせ合い積み重ね、「海」や「いのち」とのつながりを喜び合う時間を大切にしていく。図画工作科においては、学習単元の導入部でそれらの豊かな経験を思い出すようにする。単元によって違いはあるが、体全体を使って想像力を働かせたり、目を瞑って思いをめぐらせたり、言葉で話し合ったことを黒板に書いたり、ワークシートに書いたりする。また、単元導入部だけではなく、製作中に沸き起こる豊かな体験のイメージも大切にしていく。

イ 子供が自分の感覚や行為、イメージを大切にしながら、新しくイメージをつくること

《造形的なよさや面白さについて考え、豊かに発想したり構想したりすること》

「海」「いのち」にまつわる造形表現で、子供が造形的なよさや美しさを多様に生み出すためには、一人一人の子供の表現行為が認められ、それがいかなるイメージ³であるにしても安心して表出できることが必要であると考えている。子供が自分の内面世界を思うがままに表出し、学習展開の中で抱いたイメージや材料や用具、表現行為から沸き起こるイメージと融合させながら、豊かに発想したり構想したりする。そこではじめて表現の面白さが生まれる。

イメージが子供の内面世界であるという特質から、子供

の表現行為をよく観察することが大切であり、教師は子供がどんなイメージを抱いてその行為を起しているのか、把握する必要があるだろう。観察や対話などの方法も使うが、一人の教師がすべての表現行為を同時に把握することは難しいことから、単元評価シート⁴などを使って子供の表現行為を類型化して記録したり、子供自身にデジタルポートフォリオを記述させたりし、表現に対するイメージを記録していく方法をとる。また教師は、それらの見取りを繰り返し見直し、形成的に指導に生かしていくことが大切である。

新しくイメージをつくることに関し

ては、表現行為を行う子供の姿や表情、作品そのものに表れたイメージが、新しく創造的であるか、また、豊かに深まったものであるかを評価する。表現行為が続いていると、表現が停滞していく場合もあるため、造形的な見方や考え方をより深めるための発問が大切となるだろう。その製作段階で必要とされる表したいこと（表現内容）や表し方（表現方法）によって、適切な発問を用意しておく必要がある。

ウ 子供たちが互いの作品のよさや美しさ、感覚やイメージを交換できる場があること

自分の表現や、持っている感覚やイメージがかけがえのないものであることを知るために、様々な場合において、鑑賞の場を設定することを大切にしたい。授業の中で行う鑑賞では、互いの作品のよさや美しさについて言葉で伝え合ったり、ワークシートに書いたりする。

また、学習中に常に表現と鑑賞を行き来できる環境を整えることや、授業前に黒板に製作途中の作品を展示し、自然な形で友達の作品を見ることができるようにもすることも効果的と考えた。(図5)



図5 教室に製作途中の作品を掲示する

表1 図画工作科における「海」や「いのち」を題材とする単元の評価規準表

評価規準の観点 単元名 (実施期間) 授業時数	主な学習のねらい 主な活動	知識・理解・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	総合的な学習の時間 国語科の学習 体験学習等との関連
いのちのかたち (9月) 全3時間	<ul style="list-style-type: none"> 絵の具やパスを使って○や△や□などの簡単な形を「いのち」のイメージをもとに組み合わせながら、形やイメージ、表し方を考えて表すことができる。 A表現(絵) 自分の表した「いのち」のイメージについて互いに語り合うことを通して、表現やイメージの多様性にふれることができる。 B鑑賞 	<ul style="list-style-type: none"> ○△□などの組み合わせ方によって現れる形や色の感じ方がわかっている。 「いのち」のイメージに合わせて、形や色を組み合わせながら表している。 	<ul style="list-style-type: none"> 組み合わせられた形を見て画面の中にストーリーや統一感、リズムなどを感じ取りながら、自分のもつ「いのち」のイメージをさらに深いものにし、工夫して表すことができている(または鑑賞できている)。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いのち」のもつイメージを表すことを楽しんでいる。 友達と「いのち」のもつイメージを伝え合うことを楽しんでいる。 	<p>「伝わる言葉で表そう」 題名を決める(国語)</p> <p>漁師さんに漁業について語ってもらう会(総合)</p> <p>市内小串海岸での海岸遊び(総合)</p>
海の色 (10月) 全4時間	<ul style="list-style-type: none"> 「海」に関して、経験したことや感じたこと、絵の具を扱いながら感じている美しさをにじみや筆跡、濃淡などを考えながら、色彩やイメージのもつ奥深さを感じ、表現方法を工夫することができる。 A表現(絵) 互いの海に関する色や海に関する感じ方を鑑賞し合うことを通して、色の感じやイメージの多様性を感じ取ることができる。 B鑑賞 	<ul style="list-style-type: none"> 「海」のイメージを感じながら、色や感じを表している。 イメージを膨らませながら、絵の具や水の量、筆跡などを調節することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 画面に現れた色の感じを見てさらにイメージを深めたり、対話によって深まったイメージを想起しながら、自分の表現をよりよいものになるよう工夫することができる(または鑑賞できている)。 	<ul style="list-style-type: none"> 「海」の色がもつイメージを表すことを楽しんでいる。 友達と「海」の色がもつイメージを伝え合うことを楽しんでいる。 	<p>市内自然史博物館での海岸の砂の標本づくり(総合)</p> <p>読書感想文(命をテーマに考えて書く)(国語)</p> <p>地域に住まう「海の画家」との交流授業(図工)</p>
すてきから始まる絵 (11月) 全8時間	<ul style="list-style-type: none"> 社会見学や読書、日常の学校生活などで経験した「いのち」や「海」に関する出来事の中で感じたみずみずしい気持ちをどのように表すか考えながら、形や色、表現方法を工夫することができる。 A表現(絵) 	<ul style="list-style-type: none"> 経験したことや感じたことに合う表し方はどんな色でどんな形か、わかっている。 絵の具や筆などの用具を適切に用いたり、よりよい形を表すために対象を観察しスケッチしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 考えたことや感じたことをどのように構成していくかを考え、形や色、表現方法を工夫しながら、自分の表したい気持ちが伝わるように表すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の経験を工夫して絵に表すことを楽しんでいる。また、友達作品のよさをすすんで感じ取っている。 	<p>地域行事での学習内容の発表(総合)</p> <p>巖流島での釣り調査(総合) イソガニの飼育の開始(総合)</p>
海のジオラマ (12月) 全8時間	<ul style="list-style-type: none"> 砂や液体粘土、海洋ゴミやシーグラスなどの材料を用い、小さな箱の中に自分の感じている「海」のイメージをもちながら、材料の使い方や感じ、形や色などの表現方法を工夫して表すことができる。 A表現(立体) 	<ul style="list-style-type: none"> 「海」に関して表したいことの感じや、形、色などがわかっている。 液体粘土や接着剤、絵の具などの組み合わせ方やその用途がわかっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 「海」のイメージをどのように構成するか考え、材料や用具、形や色彩、質感などを工夫しながら、見る人にそれが伝わるための引き金となるモチーフを入れたり、全体の感じを整えたりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な材料を工夫して取り入れながら、「海」のイメージを表すことを楽しんでいる。 	<p>水族館との連携学習(総合)</p> <p>下関市立美術館の出前授業「海」に関する鑑賞</p>
協同製作・関門海峡 (2月) 全6時間	<ul style="list-style-type: none"> 大きな画面の中で手や足をを使って、海をイメージしながら、絵の具遊びを、色の感じのよさや美しさを感じ取りながら楽しむことができる。 A表現(造形遊び) 経験したことや感じたことをもとに、関門海峡にあったらよいと思うものについて考えながら表すことを通して、地域に伝わる表現をつくりだす喜びを感じることができる。 A表現(絵) 	<ul style="list-style-type: none"> 色や形のよさや美しさを感じ、大きな画面に手や足で絵の具をつけたときの効果を感じ取ることができている。 地域の人へ向け、何を表したらよいか考え、その形や色がわかっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 全体や部分を見渡したり、流れや動きを感じ取ったりしながら、海をイメージして工夫して動くことができる。 関門海峡全体や、自分がこだわりたい部分のイメージに思いをもって、いろいろなパーツを構成することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達と協力しながら、海峡のイメージについて進んで表し、地域に伝わる表現をつくりだす喜びを感じることができる。 	<p>他校との海洋学習オンライン交流(総合)</p> <p>下関駅の施設や下関水族館での作品展示</p>



図6 地域の公共施設へ展示された児童の作品

工 様々な人・場へ、自分の表現を発信する機会があること

学習の最終形として、学校の教室の中だけではない様々な人・場へ、自分の表現が発信できる場をつくるようにする。この場の活用方法・意図を知らせて学習に取り組むと、子供たちは伝えたい相手や主題にこめる思いなどを強く意識するようになると考えられる。

また、このような発信の場の設定においては、発信の場をはじめから目的とするのではなく、それまでの積み重ねが表現を発信するための意欲と姿勢を形成すると考えたい。発信の形態としては、企画展（後に子供たちによって関門海峡展と名付けられる）を総合的な学習の時間を中心に企画・実行する。

企画展を行うにあたっては、これまでの自分の作品やポートフォリオを振り返り、「海」や「いのち」に関わる作品を自分で決め、選ぶ。選んだ作品について学習過程で得た新たなイメージや作品から得られるイメージをもとに紹介文をつくり、キャプションに書く。多くの人へ自分の表現が発信され、評価されたり、新しい良さを知ったりする。この過程で子供たちは、「海」や「いのち」そしてその造形的やよさや美しさに関する見方考え方を深めることになるだろう。（図6）

4. 指導の具体

「すてきから始まる絵」の指導展開

◆題材のねらい

社会見学や読書、日常の学校生活などで経験した「いのち」や「海」に関する出来事の中で感じたみずみずしい気持ちをどのように表すか考えたり感じ取ったりしながら、形や色、

表現方法を工夫して表したり、鑑賞し合ったりすることができる。

◆題材の評価規準 《表1 評価規準表》の通り

◆指導計画（全8時間）

第一次 自分の表したいことを、言葉か絵でイメージし、構想する（言葉か絵かは適宜選択する）。構想したら、画用紙に描き始める。（2時間）

第二次 鑑賞と表現を行き来しながら、自分の作品をよりよいものへと仕上げていく。気持ちを表せるように着彩の工夫をする。製作中のこだわりや苦勞、うまく表せた喜びなどをデジタルポートフォリオに記録する。（4時間）

第三次 自分の作品のタイトルをつけ、参観日にお家の人へ見てもらえるように、紹介文を書くほか、互いの絵のよさを鑑賞し合う。（2時間）

◆材料・用具

画用紙（四つ切）、パス、コンテ、サインペン、鉛筆、色鉛筆、水彩絵の具、スポンジなど

◆指導の実際

① 主題をイメージする ～形成的なアプローチによって～

授業冒頭で、「みずみずしいとは、生き生きとしているということ。これまでに経験した、〈海〉や〈いのち〉にかかわる出来事の中でみんなに伝えたいことを表そう」と提案した。表したい気持ちや情景を静かな教室で想像させ、絵か言葉（どちらかを選択）でワークシートに表した。（次ページ・図7）

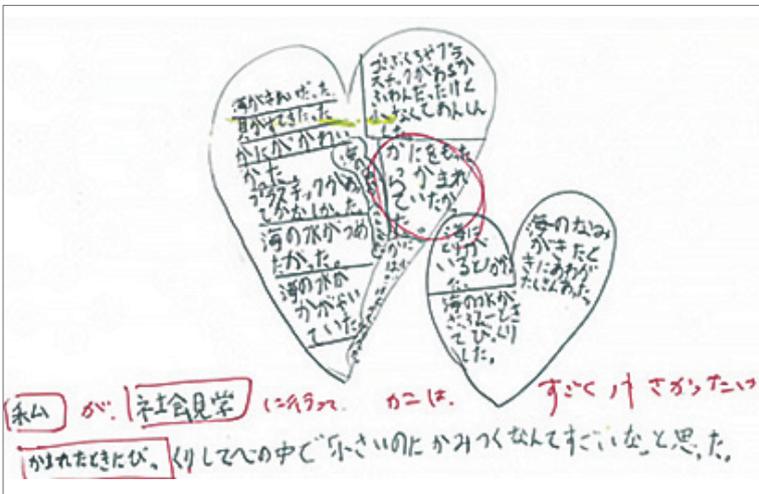


図7 言葉で表したいことを考えた子供のワークシート。沸き起こる感情をハートの中に書き出し、大切なものに赤で印をつけて描きはじめた。スケッチから描きはじめた子もいる。

表したいことを言葉で書くか、スケッチで行うかは本人に選択決定させた。また、「絵は生きている。作りだされたイメージは、表しながら変わっていくよ」と話した。その子の動きや思いを見取り、前進できているかを確認しながら指導にあたった。また、製作中のこだわりや苦勞、見つけた造形的なよさや面白さ、うまく表せた喜びを自由記述でデジタルポートフォリオに記録させるようにした。

② 共通のキーワード「生きている」

「絵が生きている」とは、抽象的であり、比喩的な表現であるが、「生きている」ということが「いのち」や「海」とよってのイメージ、絵から沸き起こるイメージを掻き立てるキーワードとして働いた。これまでの他教科での学習経験や教室内での対話の積み重ねによって、子供たちは、「生きている」というキーワードについて、「いつも入れかわり、新陳代謝を繰り返すもの」「心臓のような中心があるもの」「簡単ではないもの」「命をもつもの」「手入れを怠るとすぐに弱り、ごまかしのきかないもの」であるというイメージをもつことができている。そこで、「絵が生きているか」と発問することで、「構成要素に中心があり、そこから意味のあるつながりを生んでいるか」「生き生きとした色彩であるか」「楽しい気持ちや喜びが表されているか」「動きがあるか」などを、子供たちは感覚的に感じ取っていた。学習中の鑑賞において、「どこが生きていると思う？」と聞き、理由を聞いてみると、前述のような造形的なよさや美しさが、理由として次々に出てきた。またこのキーワードを、学習の振り返りの際にも用いた。これらから、「自分の絵が、自分の工夫や構想に



図8 「生きている」ところと、そうではないところを自覚しながら製作していることがわかる

よって生きているか」と自問自答する子供たちの学習態度が生み出されていった。

授業以外の時間でも、絵を囲んで語り合ったり、「家で続きを考えてきてもよいか」と言い、タブレット端末で記録を持ち帰ったり、小さな紙にアイデアを描いて持ってくるなど、子供たちの生活と表現が繋がっていく様子も見られた。デジタルポートフォリオを中心とした振り返りでも「生きていると思うところ」や「生かしたいところ」などが、理由を交えて書かれており、自分の作品を自分の力で作りだそうとするためのキーワードとして「生きている」が有効に働いていることがわかった。

③ デジタルポートフォリオに見られた記述

～自分の感覚や行為を大切に構想する～

デジタルポートフォリオに実際に見られた記述は次のようなものであった（括弧内はデジタルポートフォリオに残された絵の部分画像や本人の表現行為を分析して筆者が記述）。どれも、自分の感覚やイメージを大切に、発想し、自ら作りだそうとしていることがわかる。

- 秋の木がうまくかけて、生きている。（風にのって、動いているようにかけた）（図8）
- みんなでおにごっこをしているところが、生きていると思う。（動きや表情を思い出とともに思い出してかけた）



図9 きらきらほたるの里ミュージアム

- 海の輝きが、生きていると思う。(筆でしぶきをつくり、しぶきの色の組み合わせが調和的)
- これから、生かしたいと思うのは、木を描いていないところに、どうやって思い出を入れるかです。(生きているところとそうでないところを本人が見分けている)
- 地球の中心につりをしている自分をかけた。地球には、色んな生き物や人が生きているから、生きていると思う。
- 紺色の床が生きている。白色、灰色、黒色を、筆を振って、落としたら生きてきた。

④ 紹介文に見られたつくりだす喜び

②や③の取組の積み重ねによって、子供たちはつくりだす喜びを感じながら製作を終えることができた。参観日に向けて、絵を展示することになり、それに向けて紹介文を書く活動を行った。子供たちの紹介文の一部を抜粋する(紹介文は11月当時のもの)。

- 気に入っているところは、白、黄色、黒、灰色の4色を使って筆につけて、筆をとんとんしたら、点ができて、ホタルの光をイメージしたところです。きれいに仕上がるように、豊田ホテルの里ミュージアムを思い出したりして、思いをこめてかきました。(図9)
- 気に入っているところは、海です。海は「きれい」という思いをこめて筆をたたいていたら、本当にきれいになりました。色も工夫しました。下のほうが濃くて、だんだんうすい色にしていくところです。人は、目が生きていたみたいにかきました。この絵でたくさんの気持ちが伝わると思います。

これらの紹介文からは、表現行為を大切にしたい形成的な



図10 協同製作の様子

アプローチによって、子供たちが自分の感覚やイメージを大切に表し、「いのち」や「海」を実感しながらつくりだす喜びを感じていることがわかる。

「協同製作関門海峡」での子供たちの製作の様子

学習の総まとめとして、協同製作で「関門海峡」を絵の具遊びやコラージュで表現した。子供たちの表現行為は多様で能動的であった。絵の具遊びでは、全体を俯瞰しながら「この辺に白が少ないから白で歩いて！」と監督する子供が出てきたり、絵の具の感触を「気持ちいい」と楽しんだりする子供の姿があった。(図10)

続いてコラージュでは、水族館、遊園地、学校、住宅、関門橋などの有志のチームに分かれて作成したり、思い思いに自分や釣った魚、漁師さんの船などをつくって、関門海峡のどこに貼ればよいか考えたりした。コラージュする子供たちの会話は、関門橋の栈橋の長さ確かめ合ったり、巖流島の人工海岸の岩場での磯遊びを思い出し、岩の色や大きさがどれくらいであったか確かめ合ったり、何をどこに配置するか確かめ合ったりと、体験で得たイメージ、造形的な特徴と自分の思いなどが交錯していた。

また、「もうこれで完成?」「このまま伝わって大丈夫?」と教師が揺さぶりをかける発問をすると、さらに多様な表現行為が見られるようになった。みんなで乗った汽船がまだつくられていないことを心配して、家で汽船をつくってきて、

こっそり貼った子供。誰よりもかっこいい船をつくって、そこで誇らしげに釣りをする自分を貼った子供。漁師さんと釣りをする自分を、釣りをした桟橋の中の一番よい場所に貼った子供。釣った魚を詳しく描き、つりをした桟橋に向かう流れに乗せて魚を貼る子供。2年生の時に町探検でお世話になったパン屋さんをつくって貼る子供。見守り隊のおじさんをつくって貼る子供、実際に拾った海洋ゴミの袋からプラスチックやビニールを取り出して海の中に貼り、まちの中にゴミ箱を設置する子供まで出てきた。

5. 子供たちの成長を中心とする成果

◆「海」「いのち」に関する表現の造形的な多様性

それを認め合う子供たち

関門海峡展に出品された子供たちの作品の題名やキャプション、表現方法を見ると、その内容は実に多様である。イメージや感覚としては、体験を通して味わった諸感覚から感じられるもの、これまでに生きてきて感じたものがその子なりのこだわりで自然に表出できているもの、材料と触れ合ううちに沸き起こるものなどがあつた。主題としては、海洋の環境に配慮するもの、生物の生命力に驚くもの、不思議や畏怖などの感情、漁師さんや学芸員さんなど出会った人への感謝の気持ちなどが多様に表出する結果となり、継続的な鑑賞活動によって、その多様性を楽しむ子供たちの姿が見られるようになった。(図11)

◆デジタルポートフォリオの継続的な記録による子供の変容

子供たちは、自分のイメージや表現行為を大切に、自分自身の力で豊かに構想し、表現するという姿勢を積み重ねていくことができるようになった。2021年度には、表現方法に行き詰まると泣いたり、教師に正解をもとめたりする子供の姿も見受けられたが、今年度はどのような状況にあっても自分の状態を前向きにとらえ、記録していく様子が見られた。言葉だけではなく画像で簡単に記録することができる手軽さも、効果的であった。

◆つくりだす喜びをささえる心情の育ち

自分の感覚や行為、イメージを大切にすることにおいて、短絡的、もしくは概念的なイメージもいくつかは表出するものかと想定していたが、その心配は無くなった。なぜなら、教科等連動的に学習を積み重ねていく中で、子供たちの心情が

育っていることがわかったからである。年度末に子供たちが選んだ作品や、キャプションにつづられた言葉からは、海に対する心情の育ちが感じられた。漁師さんに対する尊敬の気持ち、豊かな海がずっと続いてほしいという気持ち、真理を探究することの心地よさ、関門海峡の生き物の命の尊さ、いまだ知らない生き物や海に対する畏怖の気持ちなどが、造形的なよさや美しさを支える形で存在していることがわかった。(図11)

◆アンケートの結果より

年度末に行ったアンケートの結果からは、二つの項目については、大きく向上が見られた。

- ・「身の回りがある景色やものを見て美しいと感じるか」の項目では88%の子供が「とても思う」、12%の子供が「まあまあ思う」と、全員が肯定的な回答に変化した。
- ・「命の尊さを感じるか」の項目では、68%の子供が「とても思う」32%の子供が「まあまあ思う」と全員が肯定的な回答をした。

このことから、生活や社会の中での造形的なよさや美しさに気付くようになった子供たちの変容や、学習過程の中で命を尊く思うようになった変容が見て取れる。

6. 教師の指導を中心とする成果

◆教師間の共感の広がり

協同製作では、3・4年生が合同で製作を行ったが、多い時で5・6人の教師が子供たちの製作を見守ることができた。一生懸命な子供たちの姿が共感を呼び、教師も子供の姿を夢中になって見た。結果的に複数の目で評価をすることにつながり、とても効果的であった。

◆共通体験と共通の言葉の多さ

教科等連動的に学習を進めていく中で、教室内で「海」や「いのち」に関する会話が日常的に行われた。生物の死に出合ったときには、「やっぱり生きるって簡単じゃないね」と言った子供がいた。また、国語科の学習で作文をつくるときに、「言葉って生きてみたいだね」と言った子供もいる。多くの教科等や単元の学習で、比喩的あるいは具体的に、「いのち」や「海」について言葉で示すことができたことは、子どもの豊かなイメージづくりに役立ったと思う。



命の始まり

この四角とのしましは虫です。この二重まるは女の人です。この二重四角は男の人です。このとても小さい丸は子供です。そしてこの小さい丸につながっているのが親です。そして月の様な物はお店です。むらさき色の地球にちかくなにかあるのが宇宙そしてその近にあ全てを産んだす最後にこの小さな地球は世界が無くなりまた生まれています。なぜそう言ったかと言うと恐竜も一度世界からいなくなっていると思ったからです。だから地球は大切に自然を守ってほしいです。



巖流島

僕が作ったジオラマにはこだわりがあります。このジオラマは巖流島を描いていて、1番のこだわりが船です。巖流島にある船を作りました。釣り体験をして行った時に海の波が荒かったので波を描いています。



こんな海じゃダメだ

この海岸は、ゴミがたくさんあって、魚や人たちが困っている、海洋ゴミになるかもしれないよと世界中に伝えたいです。工夫したのは、青い針金のようなのをゴミのように表す所です。



小串海岸で遊んだよ 22人の社会見学。

左下にあるのは岩です。右の奥にあるのは、しまです。右にあるのは、こうえんです。右奥にあるのは海です。この絵でかぐふうしたとこは、海です。クレヨンで描いて上から絵と具を塗りました。小串海岸の海が、ずっとあったらいいです。



ぼくのいる うちゅうのしくみ

太陽が中心になっている宇宙の絵をかいたものです。太陽の光や地球の書き方を工夫しました。またブラックホールがものをすいこんでいるようにしました。地球の命のことを知ってほしいです。



海の雨

雨が海に降り、雨から色々な色に変化していることを伝えたいです。海は、一色では無く、色々な色がある事を画家のM先生から教わりました。私は、海は、雨が降っても降らなくても美しくかがやいていることを伝えたいです。



タコの卵20万こ

タコの赤ちゃんが漁師さんから海へ返されています。そして、そのタコの親が、出迎えています。次に、工夫があります。それはたこはぬるぬるなので、紙粘土の上にボンドをぬりました。海に波が来て、そのときの水が残っていて、そこは、水のりをぬりました。最後に漁師さんが、海に返すときに、「元気に育つんだぞー」と言うのがいいなと思いました。そのことをいろんな人に伝えたいと思いました。



カニとあつたがりゅうじま

がりゅうじまのことを作ったジオラマです。がりゅうじまでいちばん心に残ったのがカニのことだったのでカニの作り方を工夫しました。あとゴミがいがいとなかったのであまり作りませんでした。がりゅうじまでのぼくの思い出のことを知ってほしいです。



夢の海

赤、青、黄色を使って混ぜているんな色を作って、重ねたりして色を塗りました。パールオレンジのところは浜辺です。てんてんの所は、海のしぶきを表しています。右下の青と黄緑の所はクジラです。クジラが横から来ているような様子を表しました。夢のような海が伝わったらいいと思います。



色々な色がある海

この絵は、赤、青、黄色、緑、むらさき、ピンクがあって、それぞれ魚の色を表しています。青と緑が、危険じゃない魚で、黄色が、獲物をおびき寄せて食べる魚で、赤と紫が危険で、赤がしぶんから他の魚を食べにくく魚で、紫が毒がある魚です。そして、ピンクが頭を使っている魚です。つまり、海は色々な魚がいて、面白い、楽しい海を伝えたいです。

図 11 関門海峡展の子供たちの出品作品

コメントは国語科の時間に学習支援アプリを使って子供が作成した原文のままです。

◆表現行為の観察が形式的な指導を生み出すこと

教師が表現行為の観察を丁寧に行い、記録していくことで、自由に表現行為を行う子供にできるだけ寄り添うことができ、それが形式的なアプローチとして役立った。

7. 社会とつながることでの成果

◆展示場所を変えていくことによる効果や、アンケートの結果より

このたび公共施設での展示を、二か所に渡って行った。一つは、市内の子育て支援施設、もう一つは市内の水族館である。公共の作品展示用スペースから、水族館へ作品を移すことによって、来館者の目的が施設によって変わることで、空間によって作品の見え方が違うことなどを子供たちは学習し、造形的な見方や考え方を深めることになった。

また、一般市民や観光客から、アンケートで感想をいただくことができた。「どの作品も海の環境などについての思いが伝わってくる」「一人一人がいろいろな思いを表すことができている素晴らしい」などの回答は、子供たちへ還元され、つくりだす喜びを支えた。特に、保護者のアンケートでは、「感動して、何度も見に行った。子供たちが自分の力で命のつながりや海の豊かさ、環境のことを体感していることが作品から伝わってきた」「地域連携の印象が変わった。子供を通して海や生物、家庭でのゴミのことを考えるようになった。子供主体で表現する動機づけを、これからも提供してほしい」などという言葉がいただくことができ、学校、連携機関ともに大きな励みになった。(図12)

◆人とつながる喜びを感じる子供たち

作品展を行うにあたり、チラシを作成し、地域の多くの世帯へお知らせをしたり、自分たちで案内の手紙を書き、自ら渡しに行ったりした子供もいる。熱心な子供たちへ地域の方から返事の手紙が来るなど、反響が広がったことで、子供たちの喜びが大きくなった。

8. 実践を通しての課題

◆共感の広がりやより多様な表現を生み出すために

今回の実践を通し、子供たちの表現に対する共感の広がりが生まれた。今後、地域や保護者、同僚に対し、子供の表現の動機づけとなった出来事や、製作過程での子供の成長など



図12 水族館での展示方法について学芸員さんからの指示を受ける子供たち

をより具体的に伝えることで、さらに大きな共感の広がりを仕組んでいくことが課題であると感じた。

また、実践の中で、特に抽象的な表現では、子供の表現主題が多様に表れることを感じた。抽象的な表現での教材研究を中心として、さらなる教科等連動のあり方、発問の精選などを行っていくことによって、より多様な表現の可能な題材やテーマについて研究をすすめていきたいと感じた。今後の課題としたい。

(むらしげ・ひとみ)

【注】

1. 本実践は、2021年度の実践から、2022年度東京海上日動研究助成対象となる。テーマ「子供たちの表現を豊かにする指導の試み～社会や生活との豊かな関わりの場の設定等を手立てとした図画工作科における学習展開の工夫を通して～」
2. 本校は、2022年度日本財団・笹川平和財団海洋政策研究所 海洋教育バイオニクススクールとして、総合的な学習の時間を中心に海洋に関する学習を実践している。
3. 竹内博は、イメージの本質を「現実世界の体験や印象を内的世界に集約的に蓄え、想像力を働かせてシンボルに変換することにある」とし、その機能について、「象徴化」という濾過のフィルターを経て、「体験場面」を「内的世界」にイメージに「変換」して摂取する動きと、「想像場面」をイメージに変換して「外的世界」に表現する動きがあると述べている。竹内博他「アート教育を学ぶ人のために」世界思想社、2005
4. 単元評価シートは、いくつかの代表的な表現行為「探索・立ち歩き・遊び・行為に没頭・立ち竦む・友達の作品を見る・教師との対話や語り・文章に記録」などの視点をもって行為を観察し、形式的に評価に役立てるためのもの。

【参考文献】

- 文部科学省小学校学習指導要領解説より (2023.6.30 アクセス)
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm
「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編」
「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」
「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編」
「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編」
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料(小学校・図画工作)」
(2023.6.30 アクセス)
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_zugak.pdf